
love song

真白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

love song

【Nコード】

N6521M

【作者名】

真白

【あらすじ】

夢を諦めた少女を変えた、ある深夜のお話。

夜の街は、怖いくらい静かだった。

深夜2時頃、人々が寝静まるこの時間が、私は好きだった。

誰もいない、何も無い。

にぎやかな昼間と一変した、この音の無い世界。

この時間になると、私は決まって外に出る。

静まり返った夜の空気と、何とも言えない開放感は、忘れたはずの
気持ちを揺さぶった。

「歌いたい」

小さく、呟いてみた。

空っぽの深夜、音を紡ぎだすのは今、私1人だけ。

音のない世界に、音を持たすことができるのは私だけ。

いつも夢見ていた。

私だけの音で、私だけのメロディーで、私だけの世界で、人々を魅
了することが出来たらどんなに良いだろう、と。

でも、歌って、歌って、歌って、私にしか紡ぐことの出来ない、最
高の音を見つけない、と意気込んでいたあの頃のは、もう戻れない
だろう。

人には限界があるということを、知ってしまったから。

どれだけ頑張っても、努力だけでは超えられない一線があるのに、
気づいてしまったから。

私は、報われない努力に疲れてしまった。

一度生まれてしまった諦めは、どんどん私の心を腐らせる。

私は歌わなくなった。

歌いなくなっても、また期待を裏切られるのが怖くて、歌えなかつ
た。

弱虫の私は、逃げることしか選べない。

そんな自分が、嫌いだった。

だから、私はそんな気持ちを無視して深夜の散歩を続ける。
音も無い、光も無いこの世界は、まるで私みたいで軽く笑える。
でも、今日の夜は、私とは違った。

「……ギター？」

住宅地から少し離れた、たまたま通りかかった公園からギターの音が聞こえる。

はつきり言って、下手くそだ。

こんなの、音じゃない。

音楽じゃない。

ただの近所迷惑だ。

どんな人が弾いているのか気になって、冊ごしに公園の中を覗いてみた。

中央に立っている木に寄りかかり、こちらに背を向けている、小柄な男の人。

街灯に照らされて、顔立ちまでしっかり分かる。

……その人は、輝いていた。

街灯が明るいか、そんなんじゃない。

すごく、すごく楽しそうなのだ。

自分の好きなことに打ち込んで、努力している。

どんなに下手くそでも、これが好きで、好きで、仕方が無い。

そんな顔をしていた。

愛しい人を見つめるように柔らかで、それでいて凜とした強さがある。

とても、綺麗だ。

この人に、深夜は似合わない。

自分の出したい音もあるし、未来に向かおうとする光もある。

私とは正反対だ。

私も、昔はあんなに輝いていたのだろうか。

毎日毎日、辛い練習をのりこえれば、必ず結果が返ってくるなんて、

決まっているわけじゃない。

なのに、どうしてあんなに頑張っけいられたのだろう。

……そんなの、好きだからに決まっている。

結果なんて二の次で、歌うことが好きだったから、続けられたんじゃないか。

報われるとか、報われないとか、そんなのどうでも良くて、ただただ好きだったから、歌っていたんじゃないか。

歌いたい、歌いたい、歌いたい、歌いたい。

「……っ」

下手くそなギターに、下手くそな歌声。

何年歌ってなかったのだろう。

体の中を風が通り抜けていくような感覚がすごく心地よい。

歌いだしたらもう止まらなくて、どんどん大きくなる声と、速くなるテンポ。

こんなにも私は歌を求めている。

もっともっと、もっと歌いたい。

知らず知らずのうちに溢れていた涙が頬を濡らす。

このまま、すべて流れてしまえばいい。

裏切られるのが嫌な臆病な自分も、すぐに諦めてしまった弱い心も、限界、という線を引いて閉じこもったしがらみも。

そうだ、限界なんて本当は無いのかもしれない。

自分で勝手に決め付けて、諦めて、ラインを引いていただけなのかもしれない。

私は、愚かだった。

曲を弾き終えた男の人は、驚いたように私を見ていた。

はっと我に返った私は、彼に背中を向けた。

知らない人のギターにあわせて勝手に歌ってしまうなんて、向こうからすれば、とても迷惑な事だっただろう。

そのまま走りだそうとする私に、男の人は叫ぶ。

「すごく、上手だった」

驚いた。

思わず振り返ってしまう。

小柄な体に似合う無邪気な笑顔がそこにあつた。

なんだか、くすぐったくて、こそばゆい。

頬がほてっているのが分かる。

この熱は、恥ずかしさなのか、それとも恋なのか。

「ありがとう」

おもわず笑みがこぼれた。

最上級の笑顔を、君に贈る。

（後書き）

初投稿です。

読んでくれた皆さん、ありがとうございます。

見苦しいところ、たくさんあったと思います。 すいません；

生暖かい目で見守ってくれたら嬉しいです。

ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6521m/>

love song

2010年10月9日16時41分発行